

< 今日の説教のポイント 使徒言行録2章14-47節 >

聖霊降臨後のペトロの説教。ここで全ての説明がなされている！

1 (14-21) 不思議な出来事の現象自体より、その目的に注目すべし。

ペトロの説教の出だし部分は、五旬祭（ペンテコステ）に起こった不思議に驚いている人々を落ち着かせることから始まっています。旧約聖書のヨエル書3章を引用していますが、「大事なことはこの後に語ることだ」とでも言うべく、ヨエルの言葉「**主の名を呼び求める者は皆、救われる**」(21)で終えて、次の本題「ではその主とは誰か」の話に移って行くのです。時代を超えて聖書が伝えようとしているテーマです。

2 (22-36) イエス・キリストこそ、神様からの救い主。

ペトロは、イスラエル人が旧約聖書の詩編の著者と位置づけて信仰者の模範と考えているダビデの詩編の言葉を引用しながら（＝ダビデが証ししていると言いたい）、イエス・キリストに起こったことを解き明かしていきます（25-28:詩編 8-11、30:詩編 132:11、31:詩編 16:10、34-35:詩編 10:1）。その内容は、「人々が主イエスを死に追いやったにもかかわらず、死が死で終わらず復活され、そのまま天に上げられて今も生きて私たちを見守られているのだ」と、まさに後の信仰者たち（教会）がイエス・キリストについて使徒信条等で言い表すことになった信仰告白と同じ内容です。そして、「このことは神様が起こされ、イエス・キリストはそのために来られた方なのだから、少しも不思議ではないのだ(24)」と述べ、彼らユダヤ人の信仰者の手本であっても人間に過ぎないダビデと比較して、「ダビデは預言者、その彼が指し示した方、そして自分たちがその証人だ」と語るのです（30, 32）。このペトロの説教を聞くと、「不思議が起こったのだから信じなさい」というのではなく、「このように、神様が立てられた私たちを救って下さるご計画がちゃんとなされて行くのだから信じなさい」と、非常に論理的で筋道が通っています。ペトロは最後にこうまとめます、「**あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシア（救い主）となさったのです**」(36)。この「**主の名を呼び求める者は皆、救われる**」(21)のだと。

3 (37-47) 悔い改め → 洗礼 → 聖徒＝教会、神の家族に加えられる

このパウロの説教を聞いて悔い改め、洗礼を受ける者が起こり、教会ができていったのです。今の私たちと同じです。世の様々なものは移り変わりますが、この神様のご計画がなされていくことは不変です。